大津歴博だより

OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

2022
No.
128

contents

壬申の乱1350年記念企画展 P1～P3 大友皇子と壬申の乱

学芸員のノートから P4～P5 寺社所在未指定文化財調査が進行中です

ミニ企画展 P6 目に見えない美しき世界 ―ミニ企画展「仏教美術にみる彩色」より―

大津市歴史博物館
令和４年９月１日 発行

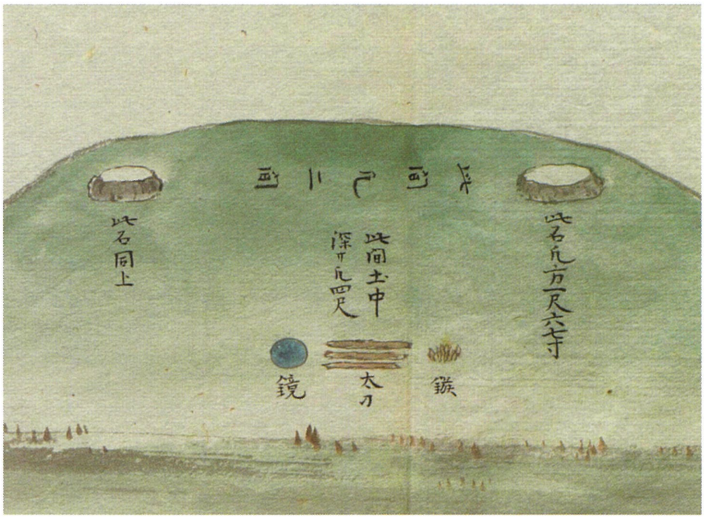
〒520-0037 大津市御陵町 2-2
TEL(077)521-2100
https://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/

壬申の乱1350年記念企画展

大友皇子と壬申の乱

会期：令和４年10月8日（土）～11月23日（水・祝）

大友皇子像　江戸時代　法傳寺蔵



別所村亀丘図（部分、「公文録」所収）　1876年　国立公文書館蔵

錦織村皇子山図（明せ99〈79〉所収）　1876年　滋賀県立公文書館蔵

壬申の乱

672年、日本古代史上最大の内乱が起こりました。これは、大津に都を遷した天智天皇の後継者争いで、十干十二支の壬申（みずのえさる、じんしん）の年に起こったことから、壬申の乱と呼ばれています。

今秋、当館では、乱の敗者となった近江朝廷側の大友皇子に注目しながら、壬申の乱の経緯と、江戸～明治時代の大友皇子（弘文天皇）陵の考証と選定のようすを紹介する企画展を開催します。

667年、中大兄皇子（天智天皇）は、飛鳥から大津へ都を遷し、その翌年に即位します。671年、天智は病床に臥し、12月3日に亡くなりました。その後継者候補には、出家して吉野に退いていた天智の弟・大海人皇子と、近江朝廷の中で太政大臣を務めていた天智の子・大友皇子がいました。両者が戦った経緯については、正史である『日本書紀』（720年成立・以下書紀と略）天武天皇紀の上巻で詳しく記述されています。

大友皇子と大海人皇子の立場や動向をどう解釈するかなど、乱の経緯については諸説ありますが、672年7月23日の大友の死によって、その決着はつき、大海人（天武天皇）が即位しました。天智が亡くなってから乱の決着がつくまでは8ヶ月ほどのことでした。

大友皇子から弘文天皇へ

今回の企画展では、乱と関連する地域の遺跡・遺物を展示して、戦いの経過を詳しく紹介しますが、もうひとつのテーマは後世の文献史料にみられる大友皇子の人物像や御陵考証の変遷の歴史です。大友皇子について、書紀の記述では即位したのか、どこで亡くなったのか、どこに埋葬されたのかが特定できず、後世の異説や伝承が多数存在しています。

書紀では、大友皇子が671年に太政大臣に任じられたとされますが、立太子や即位の記述はなく、位は天智から天武へ継承されています。ただし、書紀は天武・持統天皇の時代に編纂が始まり、天武にとって不利な情報は省かれた可能性があります。即位の有無はともかく、大友は天智が亡くなった後の近江朝廷で政務をとった中心人物であったといえます。

大友皇子については、書紀以降の史料をみると、漢詩集『懐風藻』（751年成立）に「淡海朝皇太子」と記されています。また、平安時代末期に延暦寺の僧皇円が編纂した歴史書『扶桑略記』では、天智が12月3日に亡くなった後、5日に大友が即位したとされ、鎌倉時代初期の『水鏡』もこれを引用しています。この他、公的には歴代天皇に数えられていないものの、後世の文献では、即位したとみなすものが散見されます。さらに、江戸時代になると、大友皇子即位説が活発に考証されるようになります。

水戸黄門で有名な徳川光圀の命により水戸藩が編纂を進めた『大日本史』では、天智と天武の間に「天皇大友」の項目を立てて歴代天皇に加えています。また、江戸時代後期の国学者伴信友は、大友皇子即位やその崩御地などを考証した『長等山風』を記しました。

その後、1870年（明治3年）7月、明治政府は大友皇子を歴代天皇に加え、「弘文天皇」と諡号しました。そして、急ぎ天皇陵を決定するために、幕末の考証などを参考にその探索を進め、複数の候補地があがる中で、1877年（明治10年）6月15日、大津市長等の園城寺旧境内地「亀丘」を弘文天皇陵と定めました。この「亀丘」が弘文天皇陵と決定されるまでの記録は、国立公文書館や滋賀県立公文書館に残されています。

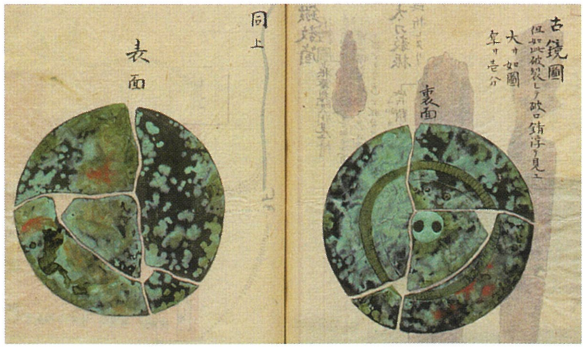
弘文天皇陵の候補地

さて、大友皇子がどこで亡くなったのか、手掛かりは書紀の記述です。壬申の乱の決着となった瀬田橋の戦いで敗れた後の大友の最期について、書紀では「走げて入らむ所無し。乃ち還りて山前に隠れて、自ら縊れぬ」（読み下し）とされます。この「山前」の場所については、地名とみるか、普通名詞と考えるかという問題もありますが、大津市内、京都府の大山崎町など複数の説があります。

滋賀県立公文書館に保管される、明治初期の弘文天皇陵候補地の調査から決定にいたるまでの史料の中で、1876年（明治9年）6月20日付で滋賀県官吏4人がまとめた「弘文天皇御陵見込書」では、次の6か所が候補地として検討されていたことがわかります。①膳所茶磨山（現大津市・膳所茶臼山古墳）、②園城寺境内亀丘（現大津市・園城寺の旧境内地でこの時点では陸軍営地）、③鳥居川村（現大津市・鳥居川町の御霊神社境内）、④山城国乙訓郡山崎（現京都府乙訓郡大山崎町・宝積寺旧境内）、⑤美濃国不破（現岐阜県不破郡関ケ原町藤下・自害峯）、⑥王子山古墳（現大津市・皇子山の山上）の各地です。

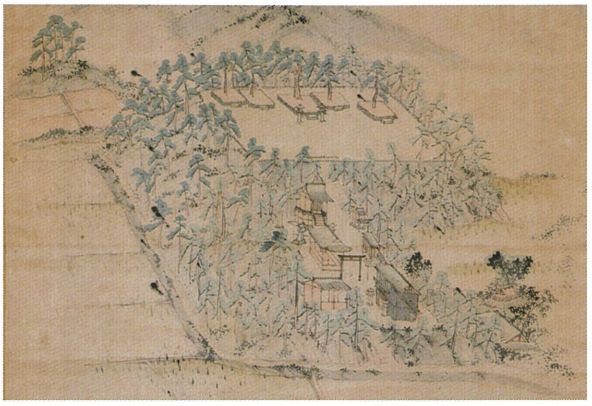
この時点では、滋賀県の官吏達は、錦織村の「王子山古墳」を弘文天皇陵の有力候補と判断していました（p.1右下図）。錦織村からの報告によると、錦織村字王子山の山上には「千載ノ古色」のある大石があり、石に触れば祟ると恐れられていたといいます。近江大津宮の推定地に近いことなども考慮され、天皇陵候補と有力視されたのでしょう。ちなみに、この山上に大石がある「王子山古墳」は、古墳時代後期の横穴式石室の一部が残っていた可能性があり、同じ皇子山上で1971年（昭和46年）に発掘調査が実施され古墳時代前期の前方後方墳であることが確認された皇子山古墳（国史跡）とは別のものと考えられています。残念ながら、「王子山古墳」の場所は、開発の中で削平されて、現存していません。

一方、最終的に弘文天皇陵と決定された園城寺旧境内の「亀丘」は、鎌倉時代の園城寺境内古図（重要文化財）に描かれていることが確認できます。また、江戸時代末の陵墓考証の中でも候補地として指摘されています。しかし、園城寺の『寺門傳記補録』では、亀丘は教待和尚が亀の骨や甲羅を積み上げた塚とされており、古来より墓という認識があったのかは疑問です。そもそも古墳なのかという問題もありますが、1876年（明治9年）に発掘したところ古鏡、鉄鏃、鉄剣が出土したといい（p.1右上図）、滋賀県権令の籠手田安定（後に滋賀県令）が同年10月に「弘文天皇御陵所在論」を記して、亀丘説を強く推薦しました。



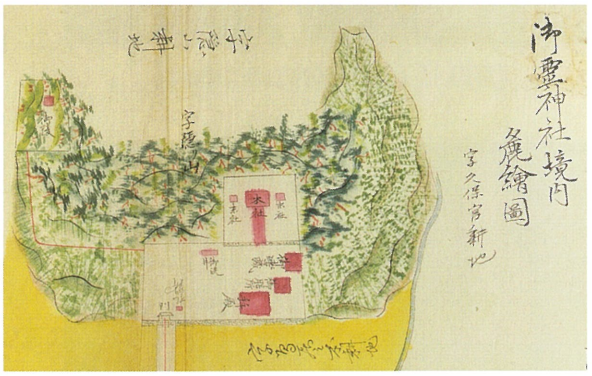
亀丘出土の古鏡図（「公文録」所収）　1876年　国立公文書館蔵

他の候補地もみてみましょう。膳所茶磨山は、現在の大津市秋葉台にある膳所茶臼山古墳のことです。古墳時代前期の前方後円墳で、大友皇子の時代よりも明らかに時期がさかのぼる古墳です。しかし、この地の場合は、古墳そのものではなく、その後円部頂上にある5基の塚が、大友皇子やその群臣の墓として祀られてきました。法傳寺（大津市西の庄）に伝わる葬り塚図（1885年）には、石で囲われて中央に木が植えられた方形の5基の塚が並ぶ様子が描かれており、今現在も、ほぼ同じ景観で祀られています。



葬り塚図（部分）　1885年　法傳寺蔵

鳥居川町御霊神社の祭神が大友皇子ということは、『東海道名所図会』〔1797年（寛政9年）刊〕でもみることができます。1875年（明治8年）に地元から滋賀県へ出された文書では、大友皇子が亡くなった「隠り山」がこの地であり、御陵を守ってきたと記されています。



御霊神社境内図（部分、明せ99〈37〉所収）　1875年　滋賀県立公文書館蔵

大友皇子を祀る御霊神社は、北大路一丁目と大江六丁目にもあります。また、壬申の乱の決着の場となった瀬田川周辺には、大友皇子やその群臣にまつわる塚や伝承がいくつも残されています。

さらに、京都の大山崎町や岐阜の自害峯のほか、千葉県や愛知県、神奈川県などにも大友皇子陵と伝わる場所があり、特に千葉県君津市の白山神社古墳（小櫃山）は、弘文天皇陵が長等に決定された後も、弘文天皇陵治定運動が活発に行われていたことが注目されています。

ざっと紹介してきましたが、企画展では、この他にも弘文天皇陵の考証と複数候補地の背景について、絵図や古文書などの歴史資料を展示して詳しく解説します。

（学芸員　福庭万里子）

寺社所在未指定文化財調査が進行中です

大津市は、京都市や奈良市に次いで、全国で３番目に指定文化財の件数が多い市町村で、このうちの９割以上を市内の寺社が保有しています。一方で、各寺社には未調査の宝物が膨大に伝来し、文化財的価値がある多くの宝物が、いまだ手つかずの状態で眠っている状況です。

そのことを受けて、大津市歴史博物館では本年から、「未指定文化財調査研究事業」をいくつかの分野で開始。そのうち、「寺社所在未指定文化財調査」では、大津市内に所在する約450件の寺院と、約600件の神社に伝わる未指定文化財を総合的に調査することで、市内に現存する文化財の所在把握を試みようと考えています。今回は、その調査の様子を少しご紹介したいと思います。

調査は、まず、「実態調査」を行っていきます。これは寺社に伝来する、近世以前の彫刻、絵画、工芸品、書跡、古文書、歴史資料、考古遺物（埋蔵文化財を除く）などの未指定文化財がどれだけ現存しているのかという、実態を把握することを目的とした調査です。現状を包括的に把握することを目的とし、簡易な法量計測とスナップ写真撮影を行い、さらに台帳を作成していきます。そしてもし、対象が大量にみつかった場合（特に軸類や経典、古文書など）は、後日に複数人で訪問し、改めて調査を行います。

さらに、文化財として価値が認められるものがあれば、後日に複数人で訪問し、「詳細調査」を行います。仏像であれば、大型ストロボによる各方面の写真撮影と、詳細な調書（法量・形状・構造・保存状態・年代）を作成します。そして、かなり重要な作品である可能性があると思われるもので、より専門的な判断が必要な場合は、外部の専門家の同行を依頼（蛍光エックス線調査なども含む）する場合もあります。

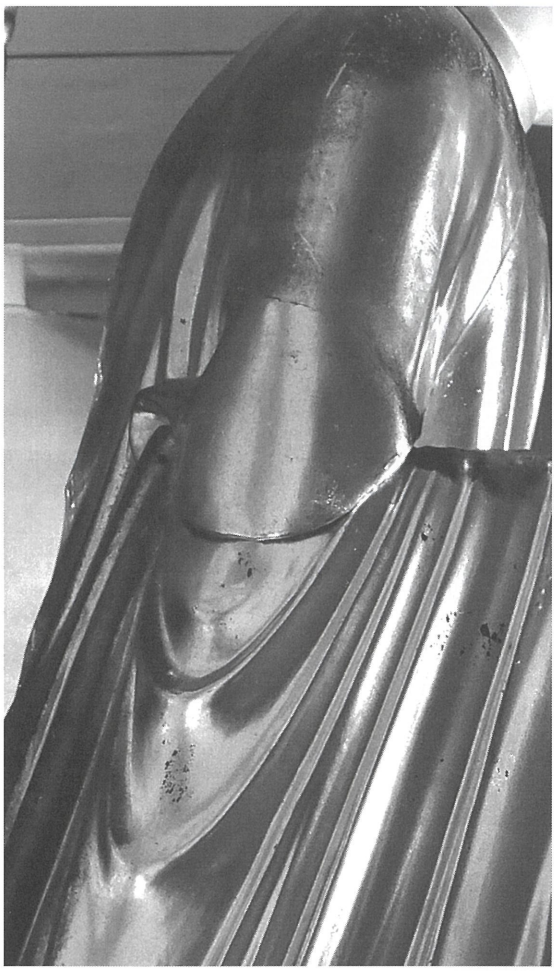
天台真盛宗寺院の調査が始まりました

「寺社所在未指定文化財調査」の第１弾として、市内の天台真盛宗寺院の文化財調査が７月から始まりました。大津市内には、天台真盛宗の総本山、西教寺がありますが、末寺としては滋賀教区の滋賀北組11カ寺と滋賀南組10カ寺の、計21カ寺があります。これらの寺院は、古い文化財が伝わっていることが既に知られたところも多く、寺宝を何度も拝借しているのですが、今回改めてすべて観て回り、再確認を行うべく作業を行っています。このうち、盛安寺などの近年に調査を行ったところは、今回の対象から外しましたが、10年以上前に訪問した場所はすべて含めました。

さて、実際に寺院をまわり始めると、まだ５件目にも関わらず、行く先々で鎌倉時代の仏像をはじめとした様々な文化財が新たに確認できました。例えばＡ寺では、三尺大の阿弥陀如来立像は、今まで江戸時代の作ではと思われていたようですが、よくみると右肘の部分で袖の外側と肘を別材にしています【写真1】。通常、この部分はすべて共木で表しますが、別材とするのは鎌倉時代中期ごろの少しの作例にだけみられる珍しい技法なのです。このことから、本像は13世紀半ば頃の造立と今回新たにわかりました。また、小さな厨子に入る千手観音坐像【写真2】は、着衣に金泥塗りの上に精緻な截金文様を施す像で、ややずんぐりとした体躯や、大振りで煩瑣な膝の衣文を表すことから、南北朝時代の造立と考えられます。銅板を刳りぬいて造る光背や、ガラス製の垂飾を具備する台座も当初のもので大変貴重です。さらに、Ｂ寺では、真盛上人筆の六字名号（上人号を名乗る前の古いもので、在家信者用のやや小さいタイプ【写真3】。Ａ寺でも発見）や、富岡鉄斎の西教寺貫首真厂（しんき）上人宛の書簡【写真4】など、興味深い宝物がいろいろと伝わっていました。

調査はまだ始まったばかりで、今後どのような宝物と御縁を結ぶことが出来るのか非常に楽しみです。歴史博物館では、このように市内の未指定文化財の調査と研究を進め、情報を収集していく予定です。なお、このようにして把握できた未指定文化財については、例えば企画展やミニ企画展、檀家・信者さん向けの説明会などをはじめとして、簡易な報告書を作成し、可能なものはデーターベース化して、HPで公開するなど、何らかの形で皆さんと情報共有できる方法も今後考えていきたいと思います。ちなみに、天台真盛宗の寺宝については、ミニ企画展「大津の天台真盛宗寺院の寺宝」（11月１日から12月４日まで）で、速報的にお披露目をする予定です。

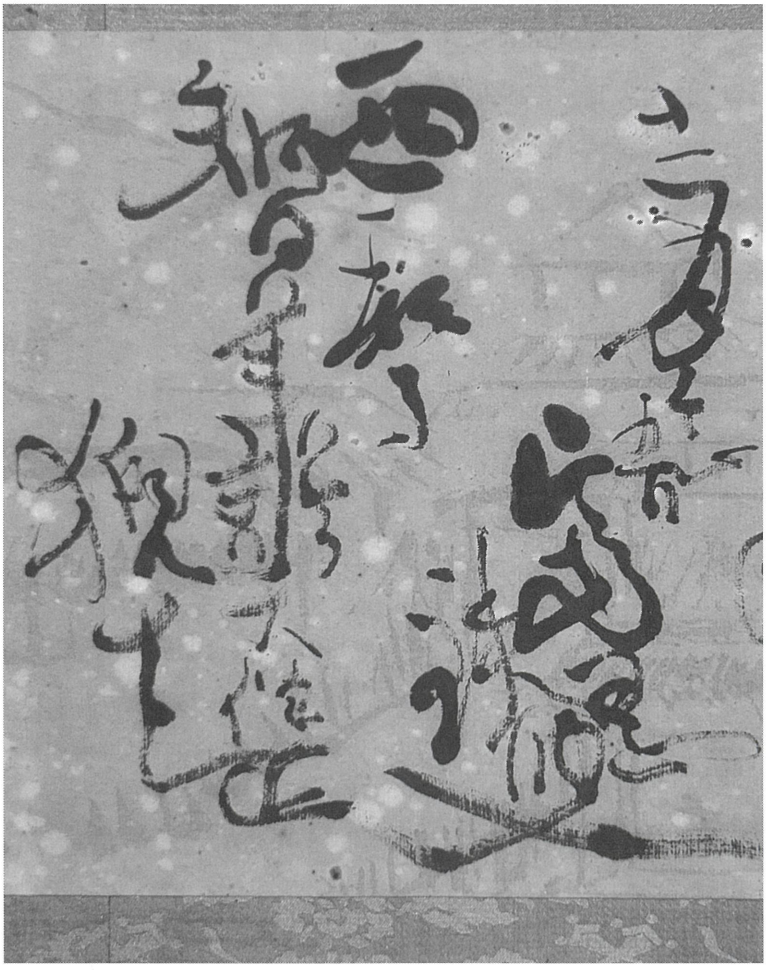
（学芸員　寺島典人）



【写真 1】阿弥陀如来立像の右肘

【写真 3】六字名号　真盛上人筆（部分）

【写真 2】千手観音坐像



【写真 4】富岡鉄斎の書簡（部分）

【ミニ企画展】

目に見えない美しき世界
―ミニ企画展「仏教美術にみる彩色」より―

大津市には、古いお寺があちこちにあり、皆さんも一度は訪れたことがあるかと思います。お寺にあるお堂の中には仏像がお祀りされていますが、皆さんは仏像についてどのようなイメージをお持ちでしょうか？金ぴか、色とりどり、黒、木や石などの素材そのままの色など、人それぞれに違ったイメージをお持ちかと思います。

では、昔の人はどう思っていたのでしょうか。今から1470年前に仏像を見た感想が『日本書紀』に記されています。

隣の百済が送ってきた仏像は、とても光輝いており、いまだかつてないものである。（原文漢文。筆者意訳）

当時の人々が見た仏像は、恐らく金銅仏という、銅の化合物に金メッキをしたものと考えられ、光を反射してキラキラ輝いてとても驚いたことでしょう。これをありがたく感じた人々によって仏教は受け入れられ、日本でも仏像が盛んに作られていくようになりました。仏像を作る素材は、金属、粘土、漆、木、石など様々で、表面は金色、あるいは色とりどりに彩色していたとされます。

そんなキラキラした仏像も、長い年月を経るに従い当初のメッキや彩色は剥がれ落ち、大部分は失われてしまいました。しかし、奇跡的にも当初の彩色が見られる仏像もわずかに残されています。

例えば、園城寺の普賢堂には平安時代に作られた木造不動明王二童子像が伝えられています【図1】。現状は、長い年月によるホコリや、護摩の煙によって真っ黒になってよく見えません。そんな時に役立つのが、赤外線カメラです。赤外線カメラは、人間の目では見ることができない光を捉えることができます。赤外線カメラで覗くと、時として思いもよらない景色に出会います。その一端をご覧いただきましょう。

【図2】は普通のカメラで撮影した、不動明王の左ふとももの部分です。彩色の痕跡が見受けられますが、表面は黒ずんでいてはっきりとはわかりません。【図3】は同じ部分の赤外線画像になります。こちらをみると、文様の形などはっきりと見て取ることができます。赤外線はものを透過する性質があるため、表面の汚れの下の彩色を映し出すことができるのです。

赤外線カメラの他にも、近年目覚ましい研究成果を挙げているX線CTスキャンは、例えば仏像の胎内などを、仏像を解体することなく見ることができますし、また、蛍光X線分析によれば、金属や顔料の組成を見ることができ、金属の生産地、使われている絵具の種類などがわかります）。

科学が発達することによって、人が見える世界がどんどん広がっています。10年後、30年後、50年後には、我々の目の前にはどんな景色が広がっているのでしょうか。

（学芸員　鯨井清隆）

【図1】木造不動明王二童子像　平安時代（12世紀）　園城寺（普賢堂）

【図2】不動明王の左ふともも（可視光）

【図3】不動明王の左ふともも（赤外線）